

平成 27 年 11 月 4 日

軽井沢町議会

議長 内堀 次雄 様

総務常任委員会

委員長 佐藤 敏明

平成 27 年 軽井沢町総務常任委員会視察報告書

1 視察日程

平成 27 年 10 月 29 日 (木) ～ 30 日 (金)

2 視察先及び目的

(1) 兵庫県 芦屋市 芦屋市役所

デジタル化防災無線整備から見えてくる課題

(2) 兵庫県 神戸市 NPO 法人ママの働き方応援隊

～赤ちゃん先生プロジェクトの事業概要～

(3) 兵庫県 芦屋市 芦屋学園短期大学

～赤ちゃん先生実習授業視察～

3 視察参加者

委員長 佐藤 敏明

副委員長 川島 さゆり

委員 寺田 和佳子

委員 押金 洋仁

委員 佐藤 幹夫

委員 大浦 洋介

委員 土屋 浄

委員 内堀 次雄

同行 藤巻 輝義 (消防課長)

同行 工藤 朝美 (上下水道課長)

随 行 荒 井 和 彦 (議 会 事 務 局 局 長 補 佐)

4 視察報告

(1) 平成 27 10 月 29 日 (木) 兵庫県 芦屋市 芦屋市役所
「デジタル化防災無線整備から見えてくる課題」

説明者	技 監	宮内 勇児 氏
	都市建設部防災安全課課長	津 賀 学 氏
	防 災 対 策 係 長	天皇寺屋 氏
	議 会 調 査 課 長	寺 川 貴 嗣 氏
	議会事務局議事調査課主査	湯 本 俊 哉 氏

a) 防災行政無線システム (デジタル防災無線) の概要

○平成 22 年よりデジタル防災行政無線の運用を開始

【それ以前にアナログの無線があったわけではなかった】

○市役所内の親局操作卓より発信 (消防本部からも遠隔操作可能)

【避難訓練や災非常時の災害情報などに限られる】

→市内 39 カ所の屋外拡声支局から放送 (高さ 15m の支柱 (3F 程度))

【風雨の影響で、特に都市部で聞こえない場合がある】

→市内 165 基の戸別受信機からも放送 (学校・役所等公共施設のみ)

【機器 3 万円、システム 20 万円という高コスト】

→J アラートと連携しており、自動で放送が流れる

b) その他の防災行政無線を補完する仕組み

○あしや防災ネット (ネット回線から登録者の携帯電話やパソコンに情報が届くシステム)

○ 防災無線が聞き取れなかった場合に、指定番号に電話をかけ、自動再生音声をきくことができる
【ただし 5 回線しかないなので、話し中の場合がある】

○ 「まちナビ」 (自治体情報サービス) の利用 (地元テレビ局サンテレビにチャンネルを合わせ、リモコン d ボタンから、データ放送画面からアクセスする)

○広報車

○有線放送 (ケーブルテレビ) の J:COM チャンネル提供の「緊急地震速報端末」を活用

c) 現在検討中のサービス

○NTT コミュニケーションズのテレドーム

○FM ラジオを防災ラジオとして活用

d)公共情報コモンズについて

県で導入した防災気象情報システム（フェニックス防災システム）を使用している。これにより、マスコミが自由にアクセスして情報を拾っていき、情報共有と住民への情報提供を容易にしている。

e)阪神淡路大震災後の防災ネットワーク

○平成 9 年から自主防災組織の結成。現在 64 団体。防災訓練、防災講座の開催。

市で出前講座を実施。防災士の資格取得を促進

○防災組織の装備品を援助する目的で、各地区に防災倉庫の設置（カギを共有）

200 万円相当の物品。チェーンソー、ポンプ、スコップ、テント、リヤカー、投光器、医薬品等。

○市内各小中学校にも防災倉庫を完備。

食料品、仮設テント、貯水槽、消防ポンプ、家庭用ガスボンベ発電機、紙おむつ等。

○小学校の年間カリキュラムに防災教育を盛り込む。

f)考察

情報伝達ツールがひとつだけでは難しいというのは、どこの自治体でも同じだということがかがえた。防災行政無線を補完するさまざまなシステムが必要になるが、芦屋市では電話をつかった自動再生、地元ローカルテレビ局の文字情報、有線放送の利用等、いくつものメディア・ICT を利用して、伝達行き届きの漏れを極力少なくする工夫がみられた。

現在のところ、どのツールにもコストや汎用性の面で一長一短があり、これひとつで大丈夫という状況ではない。デジタル化へ移行中である当町においても、複数のコミュニケーションツールを組み合わせた、より完全な広報システムの構築を目指すべきだと考える。

また情報の伝達そのものも大切だが、災害と隣り合って暮らしているという自覚をもつことも重要であろう。日頃から、火山や避難に対して正しい知識と関心を持つ機会を増やしていくことが同時になされるべきである。

そのためには、防災教育や防災士の養成等により防災に強い町民を育てるなど、設備の充実

もはかりつつ、こうしたソフトにも力を入れていくことこそが、長い目でみてもっとも効果的に人を守ることにつながるのではないだろうか。

視察報告 2

(2) 平成 27 年 10 月 29 日 (木) 兵庫県 神戸市 NPO ママの働き方応援隊
本部にて、映像を見ながら理事長 恵 夕喜子 より説明を受ける

NPO ママの働き方応援隊とは

「日本の無縁社会を解消し、子育て中がメリットになる働き方を作る」ことを理念とし、2007 年より NPO 法人として活動を開始。

女性にとって「仕事か育児か」の選択をせまられることが多い社会で、「ママの働き方が変われば日本が変わる」を合言葉に、子育てで家にこもりがちのママたちを社会へとつなげる取り組みを行う。赤ちゃんといると誰もが笑顔になり、会話が始まり、素を出すことができる。

そんな赤ちゃんの力をかりて、周りを楽にする活動を目指す。

特徴的な取り組みは「赤ちゃん先生」で、0 歳から 3 歳までの赤ちゃんがママと一緒に学校や福祉施設を訪問するもの。(学校には 0 歳から 1 歳 3 ヶ月までの赤ちゃん限定)

「赤ちゃん先生」とは

小学校区の赤ちゃん和妈妈が、1 年に 5 回を目安に小・中学校を訪問し「命の授業」を行う。

小・中学校開催の場合、地元のママが 0 歳から 1 歳までの赤ちゃんと共に 2 ヶ月に 1 回のペースで同じ児童・生徒を対象に訪問し、命の偉大さを伝えることで自殺・いじめ防止を目指す。

高校・大学開催の場合、育児体験を通しキャリア教育だけでなく、親になる責任を学ぶ。

福祉施設の場合は 0 歳から 3 歳までが定期的に訪問し、癒しと知恵や文化の継承を目指す。

(学校開催の目的)

- ・一人っ子が多い現代の子供と赤ちゃんとのふれあいの機会
- ・赤ちゃんと自分を比べて、自分より弱いものへの関わり方を学ぶ機会
- ・子育ての大変さを知り、お世話をしてくれた人への感謝の機会
- ・喋ることができない赤ちゃんを通じ、観察し考察する力を養う機会
- ・奇跡の確率で生まれた命について学び、自分を愛しむ心と他者への思いやりを学ぶ機会

(参加する母親・赤ちゃんのメリット)

- ・同じ児童・生徒に定期的に会うことで赤ちゃんの成長を共有できる
- ・家にこもりがちな赤ちゃん和妈妈が社会と繋がる
- ・赤ちゃんの人見知りを解消できる
- ・母親が自分の子供を預ける学校について知ることができる
- ・学校現場に、赤ちゃん以外の子供も同伴し託児してもらいながら参加できる

(赤ちゃん先生の仕組み)

教育機関と目的、授業内容、回数を決めながら児童・生徒の状況に合わせた内容を検討する。

30人クラスに4組程度の親子が出向く。

2ヶ月に1度、必ず同じ親子が同じグループに行く。

衛生面については、教育機関との打ち合わせ時に事前の消毒・感染症発生時の対応について話し合う。

(授業内容例)

- a) 赤ちゃんと自分を比べる
- b) 泣くを通じて受容の心を学ぶ
- c) 生かされている命に感謝する
- d) 親への感謝 など

(ママ講師の資格取得条件)

- ・1日6時間の講習 (NPOの理念・プロジェクト内容の理解等)
- ・小児用救命救急3時間を受講 (消防署で実施の半日の講習会を受講)
- ・現場実習 (1回)

(赤ちゃん先生実施のための経費)

1回開催

30人に対し、親子4組・進行2名で3万円

対象児童が10名増える毎に親子1組が増員され、それに伴い2千円が必要

(活動状況)

企業スポンサーからの出資で赤ちゃん先生を行う場合が多いが、行政主導で取り組むところも出てきている。(地方創生予算・少子化対策予算を利用)

- ・福岡県北九州市・・・平成27年 地域少子化対策強化事業 240万円
- ・大阪府茨木市・兵庫県西宮市・東京都港区

視察報告 3

(3) 平成 27 10 月 30 日 (金) 兵庫県 芦屋市 芦屋学園短期大学

～赤ちゃん先生実習授業視察～

芦屋学園短期大学幼児科では、幼稚園教諭と保育士、2つの国家資格取得が可能。実践的な学びが専門知識と現場対応力を持つ「保育のプロ」を育てる。同敷地内にある芦屋大学附属幼稚園で教育実習が行われている。

詳細：1時間目 10:00 から 11:30 (90分)

対象生徒 2 年生 (67 名を 8 グループ)

参観人は軽井沢町議会総務常任委員 8 名以外に、他大学の教諭数名

目的：育児体験を通して、具体的なお世話の仕方・母親との関わり方を知ることによって実践に活かしていく。対象生徒にとっては前回 (4 月 22 日) と同じプログラムであるが、その間に幼稚園での実習を終えてきている。実習前後での赤ちゃんへの関わり方の違いを考える。

授業の流れ：

1. 前回の復習
2. 赤ちゃんが入場し、グループに分かれ自己紹介
3. ママのお話タイム (赤ちゃんの 1 日のスケジュール・食事・排泄・睡眠・今抱えている母親の悩み・前回からの赤ちゃんの変化について)
4. 育児体験 (散歩・抱っこ・オムツ替え・食事介助などをしてもらいながら赤ちゃんのペースにあったふれあいをする)
5. 感想をシェア (生徒とママへのインタビュー)
6. アンケート記入

視察 2.3 についての考察

「赤ちゃん先生」プロジェクトは、教育面にとどまらず少子化対策・子育て支援・地域活性化などのあらゆる面で効果が期待できる取り組みであることがわかった。

この取り組みを教育面から考えるのならば、長い時間をかけ赤ちゃんの成長を目の当たりにすることで、自らの成長・命について考える機会となる。それは周りを慈しむ心に連動し、いじめの防止や他者への思いやりの心を育てるという教育へとつながる。

又、小学校区の母親が積極的に教育現場に足を運ぶことで教育に対する理解・関心を高められる効果もあり、コミュニティースクールの目的とも合致するプロジェクトだと考える。

「赤ちゃん先生」を導入するとなると、地元企業が教育支援という形で取り組むのが取り組み易いが、継続的教育を考えるならば、やはり行政が取り組むことで安定したものが提供できると思う。

しかし、まずはこの取り組みをしている「NPO ママの働き方応援隊」を知ってもらうために、学校でのテスト開催は勿論、観光の面から婚活イベントを企画し、「赤ちゃん」が人と人をつなげ、周りを笑顔にする力を実際にみてもらい「赤ちゃん先生プロジェクト」を多くの人に知ってもらうことから始めないといけないのではないだろうか。そこから更に教育面での効果が期待できることをアピールしていくことが重要不可欠だと考える。